

小2崩壊学級の学習規律の実態と指導の見通し

栞原 昭徳

An Actual Condition of Learning Rules in Abnormal Class
(Elementary School 2nd) and Teaching Perspective

KUWAHARA Akinori
(Received July 20, 2006)

キーワード：学級崩壊・学習規律・学年始め研修会

1. 本論執筆の契機

年度も実質的には終末を迎える時期になって、学校を挙げての次年度の研修を推進するために、ぜひとも筆者に指導講師をお願いしたいとの電話があった。そして、2006年3月7日（火曜）10時、山口大学教育学部の筆者の研究室に、3人の先生方が来訪されることになった。それは中国地方のH市立S小学校の校長先生、研究主任、研究部スタッフ教師、合わせて3人の先生方で、次年度平成18年度の研究テーマについての説明と指導講師の受諾を得るための訪問であった。

説明を聞いているうちに、この3月の時点でも校内には「荒れている学級」もあることが判明した。先生方の話が進むうちに、「学級崩壊」との言葉も使われた。それも40歳半ばを過ぎた女性教師が担任する2年生の学級で、この学級の指導をめぐる管理職も苦慮されていることも手にとるようにわかった。

学級が荒れはじめて担任の力量だけでは対応できなくなってからは、校長や教頭がその学級の指導に入っているとも聞き及んだ。学級が荒れはじめて担任自身の対処ができなくなってからの、担任以外の教師による支援は、ほとんどの場合、子どもの不信感を増長し、その結果、荒れが増幅することが多い。そのことを予想して、私は「なかなかうまくいかないでしょう」と応答した。校長からは、肯定の言葉が返ってきた。学級が荒れ始めたら、原則として学級担任教師の指導の力量を高める以外には、基本的な解決の方法はないのである。

S小学校での授業不成立の学級の事実を聞いて、私としては、学年始め早々の始業式および入学式の前の、教師側から見れば「春休み」半ばの学校を挙げての研修を勧めることになった。というのは、騒がしい学級（荒れる学級、崩壊学級）の現実に対処して、普通の（ノーマルな）授業が実施できるようにするためには、学年始めからの学級担任による(a)学習内容、(b)学習方法、(c)学習規律の三つの指導対象の一貫した指導が要求されるからである。

来訪されていた校長先生の指示で、研究主任がその場で携帯電話を使って自校と連絡をとることになった。学校で待機している教頭に連絡をして、研修会の日時を照会し決定す

るためであった。

その結果、新年度第1週の4月5日の午前中に「学年始め授業研究会」を実施することになった。研修会の翌日の4月6日は始業式、4月7日が入学式という日程であった。学年始めの授業研究会としては、最高のタイミングと言える。筆者は、前日4月4日の倉吉市および鳥取市での、同様の講演をすませて、H小学校の学年始め研修会の当日の朝、駆けつけることを約束した。

以上が、3月7日のS小学校からの来訪を受けて、筆者の研究室での1時間10分の話し合いの中で決定したことであった。

翌々日の3月9日、筆者は、所用のためS小学校に程近い高速道路を通ることになった。無理をすれば、その途中で1～2時間程度の時間を作ることができることも判明した。

3月9日といえば、多くの教室で3学期の教科書教材は終わってしまい、あるとしても総まとめの学習やせいぜいテストやドリルが残されているだけである。登校日も実質的にあと10日も残っていない時期である。学級担任をする教師にとっては、1年間の指導の総まとめと総仕上げの時期でもある。

しかしながら、今この時間にも、荒れて騒がしい2年生の児童の現実を目の前にして、苦しんでいる一人の教師がいて、その学校の位置も道順もよく知っている。その近くを、たとえ高速道路上を車はスムーズに通過できるにしても、私自身が荒れる学級の事実を見ることもなく、その学校のそばを、そのまま通り過ぎることはできなかったのである。

3月9日(木)9時30分、筆者は、途中のサービスエリアより、急ではあったが、S小学校に電話をすることにした。受話器をとった先方の事務によれば「校長先生は、校内をまわっていて、電話の近くにいない」とのことであった。筆者は「いま近くのサービスエリアまで来ているが、S小学校の近くを通る用事があるので(ということにして)、急ではあるが学校に立ち寄らせてほしい。校長先生には、そう伝えておいてほしい。きっと了解は得られるはずだ」とお願いをした。

10時10分、厳重に閉じてある大きな校門を開けてもらって、車でS小学校の敷地内に入らせてもらうことになる。山の斜面に開けた風光明媚な新興団地の中の小学校である。校門から玄関に進むあいだに目にすることになる校舎は、モダンで斬新な建物であった。すぐ近くには、3年続けて講演に行っているS中学校があることも思い出した。この小学校を卒業した子どもたちを見ていたことになるのだ。

玄関に入って2階の校長室へのテラスで、山口大学で教えたこともあるHさんと偶然にも出会うことになった。Hさんは、遠くから「栗原先生!」と大きな声をかけてくれた。Hさんも驚いた様子である。聞けば、いま、このS小学校のPTA副会長とのことである。先年出会ったのは、お隣のS中学校だったので、妹か弟がこの学校にいたことがわかり、このS小学校への手がかりを、もう一つ得ることになった。

10時13分、校長室ではHさんの話題から始めて、校長先生にこの日の私の来校の目的をお伝えした。その目的とは、もちろん、荒れた2年生の子どもたちの授業の実態を見せてもらうことである。できれば、授業を参観して、そのあと学級担任教師に、参観直後からできる、この学級への対処法もお伝えしたいし、修業式までの10日近くをどうにか乗り切ってほしいとの激励もしたい。そのうえに、次年度の4月早々に実施することになっている「学年始め授業研究会」を実り豊かなものにするための予備知識をも得たいと考えたので

あった。

さらに、校長先生にお会いしてすぐにお問い合わせしたのは、教頭先生を通して、担任の先生につぎのことを、早急に伝えていただくことであった。

「今日は急な来訪で申し訳ない。しかし、それは、困っていらっしゃる先生のお役に立ちたいとの気持ちからである。だから、どうか安心して、ありのままの授業を参観させてほしい。いつものような気持ちで授業をしてください」

と、あらかじめ伝えていただくことにした。

2. 小2「荒れた学級」の実態

以下は、S小学校の2年の荒れた学級を参観したときのメモをもとにして作成した記録である。*印は、筆者の考えた改善すべき点、考慮すべき点などを示す。

10時20分～40分、長休憩。子どもたちが運動場で遊び始める。人数は少ない。

2階の校長室より眺める。

10時20分すぎより、荒れる学級の男児10人が運動場でドッジボールをし始める。

体力はありそう。自分たちなりのルールに従って、楽しそうに遊んでいる。*運動場に教師の姿はない。

10時35分、3時限始業5分前、筆者は校長室を出て、2年生の教室へ。

*教室のカーテンが閉まっていて暗い感じ。女児が室内にいる。

*教室の時計が合っていない(チャイムの合図とのくいちがい)。

*担任教師を補佐する役割のもう一人の女性教師もついている様子。

10時39分、担任教師「もう何10秒で、(チャイム)が鳴ると思うよ」

その時刻には、運動場で遊んでいた男児たちは、まだ教室に見えない。

*子どもたちの机の上には、教科書・ノートなどの学習用具が載っていない。

教師が「日直さん」と指示する。

二人の日直が前が出るが、立っているだけで、何も動こうとしない。

*日直の仕事に慣れていない様子。

10時40分、チャイムが鳴る。*定刻に授業が始まらない。

10時42分、運動場でドッジボールをしていた男児たちが入ってくる。

教師「ダメです」

男児1「遅れて、すみませんでした」と言って、頭を下げる。

男児2も、同じように「遅れて、すみませんでした」という。

10時43分、ほかの男児二人も「遅れてすみませんでした」という。

その男児たちの私語「疲れた」「でも、いい汗、かいた」

教師「日直に顔を向けて！ 目を見る！ あと、5人、見ていない」

*教師の声は大きい。しかし、子どもに届いていない。

10時44分、日直の合図の言葉で、子どもたち「お願いします」と、授業始めの挨拶。

*4分遅れの授業開始の挨拶。

10時45分、教師の「国語の時間は、二つに分けます」の言葉で、実質的な授業始まり。

*5分後に授業が始まることの意味。

テストプリントの配布。10:49、CDの問題を2回聞く。

10:57、テスト用紙に記入し終わった子どもが多い。

11時00分、教師「先生が黒板に漢字を10個書くので、(テストの) 空いたところに練習してください」と言って、「秋冬、米麦、雨風？」などの漢字を板書する。

子どもたちが書き始めたところで、栗原、教室を退出。

11時05分、校長室でPTA学級委員のまとめた「保護者アンケート」に目を通す。
アンケートの内容等から、以下のことが判明する。

2/24保護者懇談会・アンケートの実施、

3/3学級保護者宛の校長文書、

3/8保護者アンケート、締め切り。

11時20分、栗原「普通の学級になることは、そんなに難しいことではありません」

11時25分、校長室を退出。

11時30分、校長先生・教頭先生・研究主任の見送りを受けて、辞す。

栗原、80分間の滞在。

3. 改善点 (メモ)

この学級の授業を参観したあとの、改善点についての気付き (メモ) は、以下のとおりである。

①この日、3月9日は、始業式から数えて、ほぼ190日目。

終業式まで、あと10日である。

まとめと仕上げの時期でありながら、学級づくりの初歩が指導されていない。

その結果、子どもたちが授業参加のための初歩的なルールを身に付けていない。

②そのうち、最も重要な事項が、毎時間の授業の始まりに関する事柄である。

- ・チャイムの合図とともに授業を始める。

- ・学習準備ができる。

- ・時計を意識する (教師の働きかけの必要)。

- ・日直の仕事の仕方に習熟している。

- ・必要であれば、授業の予習もできる。

③教室環境づくり

長休憩なのにカーテンが閉まっていて暗い教室。

大きくて横長の教卓とオルガン

=子どもを黒板に近づけないバリケードの役目をしている。

④教室の時計が合っていない。

子どもの目の前で、時計をあわすのも意識付けの一つ。

⑤教師の声は大きいですが、子どもには届いていない。

注意の言葉は多いが、誉める言葉 (評価の言葉) は少ない。

語りかけの言葉を。

- ⑥チャイムを意識していない子どもたち。
日直も、みんなの前には出るが時刻を意識してはいない様子。
- ⑦日直の仕事に習熟していない。
- ⑧チャイムが鳴っても学習準備のされていない机の上。
- ⑨着席の仕方、手の位置、鉛筆も後方、左手の位置など。
- ⑩小さな声の私語がある。
それに対して、教師は「シー」と注意するだけ。
私語がいつまでも残る大きな原因の一つは、教師が一貫して注意をしていないこと。
もう一つは、ときに私語を拾いながら授業を進めていること。
- ⑪漢字の練習への動機付けが必要か
たとえば「全部で3回ずつ書こう」など、達成目標の明示が必要。

以上。

4. 「abnormal class」という表現をめぐって

筆者は、1987年に『騒がしい学級の授業指導』という著書を世に問うた。それは、1979年度に自分自身が担任することになった4月当初においては「騒がしい学級」であった子どもたち（注1）が、2学期半ばには「普通の（ノーマルな）」学習活動に取り組める学級となり、最終的には、参観者が感心するほどの学習のできる子どもへと変化していった実践の記録である。

子どもたちの勝手気ままな行動や様々な要因によって授業が成立しない学級を指して、「騒がしい学級」「荒れた学級」「崩壊した学級」などと呼ばれることがある。

「騒がしい学級」とは、文字どおりの「授業時間においても子どもたちが騒いでいるような学級」のことである。

「荒れた学級」も、「乱暴な振る舞いをする子どもたちがいたり、もめごとや争い（いさかい）などの争いごとが多くて、肝心の授業が成立していない学級」のことである。

近年、マスコミ等で広く流布している「崩壊した学級」とは、教育の一環として本来的に学級になくしてはならない日直・当番・係などの組織や、学級会などの話し合いの場、子どものノーマルな感覚と教師の指導力を背景とした仕掛け（構造）が、これまた文字通り「崩れたり壊れたりしている学級」のことである。とりわけ、「学級崩壊」という呼び方は、一般社会からだけではなく、教育界においても興味本位な視点からの名付けであるように思えてならない。

本論を執筆するにあたって、英文タイトルをつける必要が出てきた。「騒がしい学級」「荒れた学級」「崩壊した学級」のいずれにしても、本論を執筆する時点では、「abnormal class」と翻訳するのが、そのような学級の実態を表現できるのではないかと考えている。もちろん、学級崩壊等の現象が現れたのは、上記の言葉が多用され始めた、ここ10年ばかり

りのことだというわけではない。

筆者の限られた体験でも、次のような事実があった。

筆者は1971（昭和46）4月に、公立小学校教師として教職生活をスタートした。それ以前の3年間は広島大学大学院の学生として教育方法を専攻しながらも、現場に赴任する直前の2年間は、広島市教育委員会社会教育課の嘱託として、毎夕、中学生の学習指導と生活指導に当たった。その仕事の中で、集まってくる中学生の保護者代わりとして、当時の中学校の授業を参観する機会も得た。夜、集まってくる中学生たちからも、学校の授業に対する生の言葉を聞くことも多かった。当時聞き及んだ教師の口からも「まともに授業が成立している中学校は半数くらい」という言葉を聞いたこともある。それほどに当時は、授業不成立の中学校は多かったのである。そのころ「騒がしい学級」あるいは「荒れた学級」という表現はあったが、「学級崩壊」との表現はなかった。

もともと小学校や中学校にやってくる子どもたちが、ただ学校にやって来ただけで、そのまま放置されていたら、子どもたちは「騒ぐ」以外にすることはない。そこには教師による指導が必要になる。

子どもたちが30人も集まり、そこになんらかの秩序が生まれるような働きかけがなければ、騒がしくなるのは当然である。ちなみに「集まる」という漢字は、木の上に「ふるとり（鳥たち）」がいる状態を表している。そこには、学習活動に専念できる学校という場にふさわしい秩序が必要となる。その秩序づくりも、教師の仕事の範囲内なのである。専門家の教師がいるのであるから「騒がしい学級」のままではいけないし、「荒れる学級」になってはいけないし、学級の組織や秩序が「崩壊する学級」であってはならないのである。

子どもの秩序感覚や社会性を育てたり、授業参加のルールやマナーを意図的に育てたりする側面の指導を、私は「学習規律」の指導と呼んできた。最近の学校教育の乱れや不成立の現実を目前にして、文部科学省関係の文書にも「規範」などの言葉が見られ始めた。一般に「規範」とはノルム（norm）である。この規範という言葉を見ると、あたかも、子どもから懸け離れた徳目を、教師側から教え込む（ないしは上から授与する）というイメージを抱きやすい。しかし、もともとの「ノルム（norm）」という言葉の、日常生活での使い方によれば、それは「ノーマル（normal）」、つまり大勢の子どもたちが一箇所に集まって授業をするのに相応しい「普通の、当たり前」の状態をつくりだすための指導が「学習規律づくり」なのである。授業参加のルールやマナーを、子どもたちの集団の力をも発揮させて育て上げようとするのが、学習集団づくりにおける「学習規律の指導」なのである。

近年、生活科や総合的学習への批判が高まっているが、私自身は「生活科の目標や総合的学習のねらいなどには、一点の非もない。非があるとすれば、生活科や総合的学習に関わってきた教師たちの実践的力量であり、それを養成してきた側にある」と考えている。

2003年6月、山口県萩市を舞台に日本生活科・総合的学習教育学会の第12回全国大会を開催したが、その折りに務めた山口萩大会会長としての挨拶の言葉には、当時の学力低下批判に対応する授業実践の必要と説き、「学習規律」に関しては次のように記している。

（前略）生活科は「各教科の授業」の中の一つであり、総合的な学習の時間は各教科・道徳・特別活動とならぶ日本の学校教育の「4分野の授業」の中の一つである。

生活科も総合的学習も「授業」であることを、私たちは片時も忘れてはならない。

したがって、生活も総合も綿密な計画のもとに実施されなくてはならないし、どのような学力をつけるのか、どのような評価をすべきなのかも構想されていなければならない。

ところで、このたび山口萩大会に参加される先生方の学級では、

- ・どの授業の開始時刻も子どもたちの自主的な組織や力で守られているであろうか、
- ・どの授業も忘れ物や私語が日常化しているということはないであろうか、
- ・それぞれの授業にふさわしい学習の準備が子ども自らの力でできているであろうか、
- ・どの授業においても自分の考えたことや調べたことを堂々と発表できるであろうか、
- ・他の人の発表を聞き合い、触発されながら次元の高い発表がなされているであろうか。

以上のように子どもたちが、どの授業においても共通して身に付けておかないと、授業が成立しづらくなったり、活発な学習にならない指導事項がある。

それに対して私は、どの教科・分野にも共通する「学習規律」と名付けてきた。

戦後の日本の教育界では、「学習規律」への誤解が連綿として続いてきている。

規律とは「ノルム(norm)」である。このノルムのある状態のことをノーマル(normal)というのであって、規律の無い状態こそがアブノーマル(abnormal)なのである。

この学習参加へのルールやマナーを含む「学習規律」の基盤の上にこそ、生活・総合の「学習内容」の習得と、生活・総合に独自の「学習方法」の習得も可能となる。(以下略)
(注2)

以上述べてきたように、学習規律の指導は、特別に外部から規律事項を持ってきて命令を注入することではない。そうではなくて、授業が成立するために必要となる、ごく普通の「授業参加のためのルールやマナー」として、子どもたちと一緒に「学級の実力」あるいは「授業の実力」として創出するものである。

本論の前半で取り上げた小2の荒れる学級における学習規律の実態についても、ごく普通の当たり前のことが指導されていないことが明らかとなる。

5. 小2「荒れた学級」に対する指導の構想

急遽、参観させてもらった「崩壊した学級」の事実を見て、私が直観したのは「普通の学級になることは、そんなに難しいことはありません」という結論であった。

学年始めの全教師の参加による研修会は4月5日の午前中、栗原による2時間半の講演を聴いてもらうことから始まった。その研修会のために準備したのが以下の要項である。

荒れる学級では、基本的な学習規律が指導されていない。そのことを中心に組み立てた要項である。理解を助けるために、若干の加筆が施してある。

2006 H市・S小学校、学年はじめ授業研究会

●学年始めの学級指導と授業指導

—学年はじめ、何から、どのように指導するか—

4月5日(水曜) 9:00-11:30
栗原昭徳/山口大学教育学部教授

1. はじめに

- a. 教育現場での「研修」は、教師にとっての「学習」の問題であること
最小の時間と労力で、最大の結果を
*研修部(研究主任および部員)の役割は、その学校の実践を左右する。
ひいては、その学校の児童生徒の学力を左右する。この自覚が大切。
- b. 目の前の子どもの事実=教師の「指導の結果」であること
仲良く勉強する学級も、騒がしい学級も、崩壊学級も、・・・
- c. 子どもの「学習力」は旺盛かつ強力であること
参考:栗原『子どもの学習力』(注3)
- d. 学校(授業)の3要素とは、教師・子どもたち・教育内容であること
特に「子ども相互の教育力」を生かした授業指導=学習集団づくり

2. 「わかる」とは

- a. 問題「とてつもなく大きなかぶができました。」
- b. 「既知既習」と「未知未習」をつなぐもの
ア. 課題性

イ. 「置換」と「類推」
- c. 「わかる」という漢字と熟語
- d. 英語・ドイツ語の「わかる」
- e. わかる授業の成立領域

3. 「わかる」ための三つの「分ける」

- a. 教えたことを「分けとる」=専門家の教師の仕事
- b. 「分かれて立つ」=学習内容(教材)を対象化する
=目の前に据える
- c. 「分ける」=子どもの仕事
=既知と未知を分ける
=既知と置き換える、類推する

4. 日本の小学校教育の4本柱（4領域）

- a. 各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間は、すべて「授業」であること

別表第1 (24条の2関係)

区分	各教科の授業時数									道徳の授業時数	特別活動の時数	総合的な学習の時間 の授業時数	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育				
第1学年	272	/	114	/	102	68	68	/	90	34	34	/	782
第2学年	280	/	155	/	105	70	70	/	90	35	35	/	840
第3学年	235	70	150	70	/	60	60	/	90	35	35	105	910
第4学年	235	85	150	90	/	60	60	/	90	35	35	105	945
第5学年	180	90	150	95	/	50	50	60	90	35	35	110	945
第6学年	175	100	150	95	/	50	50	55	90	35	35	110	945

(1単位時間＝45分)

*小学校1・2年生の国語の全授業に占める割合は、ほぼ33%である。

低学年担任教師で、国語の指導の不得意な教師は、学力向上に資することはできない。

b. 授業活動と授業外活動

*従来、教科活動と教科外活動、

教科指導（学習指導）と生活指導、のように対比されてきた

c. 小学校教育における授業外の生活指導（学級集団づくり）の大切さ

5. 授業とは

a. 陶冶(Bildung)と訓育(Erziehung)の過程である

b. 教授(Lehren)と学習(Lernen)の過程である

c. 認識(Erkenntnis)と練習(Uebung)の過程である

6. 教育の方法、5つの類型

a. 注入(indoctrination)

b. 操作(operation)

c. 指導（間接指導）

d. 援助・支援

e. 放任

7. 授業の中で教師は何を指導するか（三つの指導対象）

a. 1時限の授業ごとに変化発展する「学習内容」

b. その教科・領域に独自の「学習方法」

c. どの教科・領域にも共通する「学習規律」

規律・規範（norm）という言葉

ア. 発表の仕方（表現の仕方）

「 $2 + 3 =$ 」をめぐる多様な発表の仕方

イ. 発表の聞き方（応答の仕方）

ポイントは、聞くことの活動化（行為化、表現）

ウ. 班やリーダーの活動の仕方（協力の仕方）

エ. そのほか

日直や学習係の活動、授業の始まりの自主管理、学習準備の仕方、

着席の仕方、挙手の仕方、発表をめぐるルールなど

新任教師の三つの悩み（遅刻、私語、忘れ物）

8. 学年始めの学級指導

*指導原理は「子どもの自主判断を通して」、「活動を通して」、
「指導的評価を通して」 *間接指導の原理

a. 教育の場としての教室環境づくり

学校保健法3条、学校環境衛生

「学校においては、換気、採光、照明及び保温を適切に行い、清潔を保つ等環境衛生の維持に努め、必要に応じてその改善を図らなければならない。」

b. 学習環境づくり

教卓、教師用事務机、オルガン、学級図書、給食配膳台、・・・

机の縦横を、床のタイルや板の目に合わせて、そろえる

- c. 学年始めの最初の出会いも「言語コミュニケーション」である
教師の話術、ア. シャベる（喋る）

イ. はなす（話す＝放す）

ウ. かたる（語る＝騙る）

栗原、33年前の1年入学式直後の学級指導、資料別紙

落語に学ぶ語り、ア. 基本は、はっきり、ゆっくり、本気で、大きな声

イ. 子どもの目を見て、語りかける

*視線の範囲

*腕時計の仕方

ウ. 仕掛けのある話をする

*落ちのある話＝落語

子どもの応答行為を引き出す「語りかけ」を

「はい」という「返事」の中身

「はい」は、たんなる「返し言葉」ではない

- d. チャイムの合図で授業が始まる
授業始まりの時刻を気にする教師と子ども
*時刻・時間は客観的事実（ルール）

日直の活動（班個人日直から、個人日直へ）

学年始めに集中的な指導を、そうすると1年間通用する

学習規律は、子どもから見れば「学級の実力」であり「授業の実力」である

授業始まりの練習も、学年始めにする

- e. 私語、その意味

私語の克服

9 ■ 学年始めの授業指導

a. 授業での「学習環境づくり」

机の列をまっすぐにそろえる

b. 学習準備の指導

学習に必要なものを明確に指示する

机の上に置く

*教科書・ノートを開く

新しい教科書の開き方

ノートの日付や題名を書く

自習・予習を始める

c. 日直による授業時間の自主管理

ついでに、黒板の日付、日直の氏名、授業の題名、なども書く

日直の授業始めの挨拶の言葉

「今から、2時間目を始めます。気を付け、礼」

「今から、2時間目の国語を始めます。しせい、礼」

「今から、2時間目の国語「かさこじぞう」を始めます」

「今から、2時間目の国語を始めます。

今日は、「かさこじぞう」のじいさまが帰ってくるところからです」

d. 着席時の姿勢、教科書の持ち方、音読のときの立ち方、・・・

e. 新しい教科書の開き方（別紙）

f. 発表のときの挙手の仕方、指名されて発表する

* 2学期になっても、3学期になっても私語的発言の続く学級

g. 机の上の配置（教科書、ノートのおき方）、

- h. 鉛筆の持ち方、左手の位置
- i. ノート活動を中心にした教科経営
*鳥取県の先進的中学校の実践事例
- j. 始業式の日「授業時間」を確保し、最初の学習をする
学習ノート（算数か、国語）の配布

ナンバー（番号）を付ける

このノートは授業でも、家庭学習でも使う（何冊使ってもよい）

始業式の日、家庭学習を出そう。*宿題と家庭学習、発展学習

●栗原から草野先生への助言のFAX（別紙）

- k. 発表は手を上げて、先生（他の子ども）の了解を得てから
- l. 発表は、聞き手のほうを向いて
- m. 聞くときには、顔を見て、うなずきや首傾げも
- n. 黒板での発表を導入しよう
- o. 授業中、手伝うことはないか

10 ■ 終わりに、先生方に期待すること

- a. 子どもは「真似び＝学び」の天才である
教師の言動は模範であり、典型であること

姿勢、仕草も、本の読み方、書き方、などの学習にかかわる活動も、

言葉づかいも、歩き方も、食べ方も、勉強の仕方も、

緊急事態に対する対応の仕方も、人に対する対応の仕方も、・・・

考え方も、生き方も、・・・

- b. 5月連休までに「遅刻・私語・忘れ物」の克服を
ベテランは1週間、10日で

連休明けに、がっかりしないこと。

軌道修正のチャンスととらえる。

*夏休み明けには、もう一度、軌道修正のチャンスがある

c. 授業指導の最低限の理論だけは勉強すること

せめて、始業式までに、乗原の『わかる授業をつくる先生』を
読んで（読み直して）教壇に立つこと

たくさんの本を読んで「授業の理論（教授学）」を知っておくと、
指導の方法や手立てを創造する*ことができる

*考え出す、作り出す、編み出す、・・・＝自分らしい実践ができる

d. パソコンと対面する時間よりも、子どもと対面する時間を多くすること
学年はじめの朝の時間、休憩時間に、子どもと遊ぶこと

教室にいる時間を、できるだけ多く

e. 「残すための実践」ではなくて、「残すに足る実践」を目指すこと
「公開するための実践」ではなくて、「公開するに足る実践」を目指すこと

たくさんのお報告書が刊行され、各地で公開研究会は多いが、
「子どもの事実を見てください」といえる実践（教師の仕事）は少ない

6. まとめとその後の経過

授業が成立しないで荒れる学級の主要な原因が、授業参加のための初歩的な学習規律が指導されていないという事実が明らかとなった。それは、従来から私が言及してきた「新任教師の三つの悩み」の内容でもある。「三つの悩み」とは、①遅刻（チャイムの合図で授業が始まらない）、②私語（いつまでも私語が授業を支配する）、③忘れ物（学習用具が無いので学習に参加できない）の三つである。これらの三つの悩みの克服の方法や、学習規律の多くは教員養成学部出身の教師であっても、よほどの努力をしないと身につけることはできない。せっかくの附属学校での教育実習を体験するのだが、実習生側も教師側も注意を払わない事項だからである。この点に関して、現行の教育実習には、まだまだ改善の余地が多い。

新年度最初の「学年始め授業研究会」は4月5日の午前中に開かれたが、その会場には3月9日に授業を見せてもらった女性教師の姿は無かった。転勤されたとのことであった。私は校長先生へのお礼の手紙の最後に、次のことを書き加えた。

「校長先生に、一つほど、めんどうなお願いがあります。

3月9日に2年生の教室を見せてもらった担任の先生に、拙著『わかる授業をつくる先

生』を1冊、どうにかして贈呈しておいてくださいませんか。

私の方、その先生のお名前も存じあげておりませんし、今後とも、お名前や学校名も知ろうとも思っていない。

校長先生から「栞原はS小学校で、ふたたびお会いしたかった。今後とも、ますます頑張って教職を続けていただきたい」とお伝えください。」

騒がしい学級は、教師の「指導の結果」である。だからこそ、指導の仕方を変えれば、騒がしい学級は、活発に学習活動にとりくむ学級に変身する。

5月連休明けの校長先生からの報告によれば、2年生の荒れた学級の子どもたちは、3年生になるときの学級編成でクラスの子どものメンバーが変わり、新しい学級担任も実践力のある教師が率先して担当することになった。現在では、すでに学級は落ち着いて学習を進めることのできる状況にある。保護者から寄せられる意見は、良好であるとのことであった。

筆者の役割は、この段階で終わったことになる。

注

(注1) 栞原昭徳著『騒がしい学級の授業指導』(ぎょうせい、1987年)は、1979(昭和54)年度、広島大学附属小学校2年の学級担任としての1年間の記録である。

筆者は、公立小学校で3年、5年を担当し、広島大附小では、1年、2年、3年、4年、5年、6年と持ち上がって担任した。そして、小学校教師最後の年に「騒がしい学級」を担当することになった。

以来、授業不成立の騒がしい学級、荒れる学級、崩壊する学級での授業指導や、実践的な指導技術に大きな関心を寄せてきた。

(注2) 栞原昭徳「日本生活科・総合的学習教育学会、第12回全国大会(山口萩大会)開催にあたって—今、生活・総合の授業の実践が問われている—」、『第12回全国大会(山口・萩大会)要項』平成15年6月21日発行、22ページ。

(注3) 栞原昭徳編著『子どもの学習力—新生児・乳幼児から小中学生まで—』(2004年7月2日発行)の2～7ページの写真を用いて、生後40分の新生児のオリエンテーション能力や、2歳児の真似をする能力を説明した。